寄せ太鼓

北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号（〒807-1261）
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

未だ収束が見えないコロナウイルスですが世界ではウィズコロナに向かって舵を切っており、日本でも対策が進められ、我が木屋瀬も感染対策として二年間「宿場まつり」を中止していましたが、今年は十一月六日に開催いたします。

「宿場祭り」は木屋瀬の古い町並みと、伝承盆踊りや手づくりの祭り等の文化行事を市内外にアピールする「町おこし」として始まり、平成五年十一月三日に第一回「みんなで踊ろう筑前こやのせ宿場まつり」の開催から今年で二十八回目を迎えます。また、平成十四年の第十回からは木屋瀬町の自治区会・商工連盟・商栄会・まちづくりの会・宿場踊振興保存会・老人クラブ連合会・郷土史料保存会・青年会の八団体主催となり、日程も十一月の第一日曜日に変更となりました。

今年の実行委員会では実行委員長に木屋瀬自治区会長「山田靖」氏が選出されました。各部会長からは祭りの方針説明が行われ、皆で一丸となり祭り当日に向けて盛り上げて行きます。

今回も「木屋瀬宿場をどり」の総踊りをメインに近郷の伝承踊り・開会式での市消防音楽隊の演奏・木屋瀬中学校吹奏楽部のパレード及び演奏・小学生の学習発表と作品展・幼稚園児による絵画展・歴史探訪スタンプラリー・市消防局のはしご車試乗・起震車による地震体験等に加えて街道筋には大道芸・青空市場（キッチンカー・マルシェ）・フリーマーケットが出店予定です。

また、残念ながら新型コロナウイルスの影響により、住民参加の綱引きは中止となりましたが、「近郷の伝承踊り」では今回の祭りを盛り上げる為に皆が一丸となって奮闘いたしますので、ぜひ御期待下さい。

余談ですが宿場まつりは、先の二年間の中止がなければ今年で三十回目の開催であり、更に、令和二年度は宿場をどりが県指定の文化財に指定されて六十周年という記念すべき年でした。令和六年度の三十回目開催時に、町中の皆さんと共に二つの記念を盛大に踊って祝いましょう。

また、この「宿場まつり」は、木屋瀬町皆様の「参加と協力」無くして成り立ちませんので、何卒皆様の御支援を宜しくお願い申し上げます。

長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会
広報部会長　藤　政文

第86回企画展『旅人と木屋瀬　さまざまな休泊者たち』

会　期：10月29日（土）～12月18日（日）　※入館料が必要です。
会　場：長崎街道木屋瀬宿記念館　みちの郷土史料館

筑前国の宿場町の中でも非常に交通量の多い宿場町であったため、木屋瀬に訪れた歴史上の有名な人物は少なくありません。長崎奉行などの役人やオランダ商館に駐在している外国人、参勤交代のために通った九州西半の大名や学者、文人、将軍への献上品である動物まで木屋瀬宿を通過し、長崎・江戸を目指しました。

本展は、そんな長崎街道の宿場町である木屋瀬宿に宿泊・休憩・通過した多くの人物、または動物について、紀行文や絵図を用いたパネル展示で紹介する企画展です。当時の旅人の気分になって見学してみてはいかがでしょうか。

企画展と落語会

真打 林家きく麿　こやのせ座落語会

日　時：11月3日（日）　開場13：30　開演14：00
会　場：長崎街道木屋瀬宿記念館　こやのせ座
入場料：大人　1000円（当日1200円）　中学生以下　500円（当日600円）
定　員：先着150名（全席自由）※電話での予約制
申込先：長崎街道木屋瀬宿記念館　TEL 093-619-1149

北九州市出身の真打落語家である林家きく麿さんをお招きし、こやのせ座にて毎年恒例の落語会を開催いたします。芸術の秋に是非一度いらしてみてはいかがでしょうか。

第15回　筑前木屋瀬 今昔歳事記

紅屋泰助氏（故　柴田泰助氏）の「筑前木屋瀬今昔歳事記」の第15回目です。

今回は、「ひろば北九州」平成22年11月号の行事・風物について、後編としてご紹介させて戴きます。

まちづくりイベント〔宿場まつり〕

筑前伝承盆踊りの祭典など多彩に

◎**野面の盆踊り**（北九州市無形民俗文化財）…江戸末期に流行った地方歌舞伎の芦屋役者や植木役者の影響が大きいと云われ、遠賀川流域に広く分布する系統に属します。「夏はほたる」「奴」「うつつ白波」「ダシ」がございます。「ほめ言葉・返し言葉」の妙と、移動の際は地舞台を先頭に大傘・踊り手の順で道囃子を奏じるのが特徴でございます。

◎**植木の三申踊り**（福岡県無形民俗文化財）…植木は江戸時代に長崎街道と筑前内宿・赤間街道との追分宿として、また木屋瀬の川越え脇宿として栄えました。地方歌舞伎の一段として名を馳せた植木役者の故郷でもございます。本手は念仏踊りを基にした、仏を敬う踊りと云われています。思案橋は民謡的な踊りで、男性の七手、女性の次郎さが加わり、三様の踊りが踊られます。

◎**芦屋のはねそ**（福岡県無形民俗文化財）…踊り念仏の空也上人の弟子が始祖とされる芦屋役者・芦屋歌舞伎。その芦屋に伝わる盆踊りでございます。天明二年、当時日本一の千両役者と云われた歌舞伎の尾上三十郎を大坂から招き、丸一年にわたって伝授されたものでございます。

尚、はねそは一般の盆踊りのような輪踊りではなく、踊り手の人数によって何列かに並ぶ「並列式」とでも云うべき、珍しい形式で踊られます。

◎**直方の日若踊り**（福岡県無形民俗文化財）…東蓮寺藩の城下町、直方に伝承される盆踊りでございます。素朴な「思案橋踊り」（次郎左踊り）と優雅な「本手」との二様の踊りをもって「日若踊り」と申します。

◎**前田の盆踊り**（北九州市無形民俗文化財）…「みちのく」と「思案橋」とがございまして、明応年間、大内氏に攻められた麻生花尾城兵の戦死者の霊を弔うため、その子孫や村人が始めたと伝えられ、大原女と同様の支度で踊られます。

◎**下大隈の里踊り**（中間市無形民俗文化財）…下大隈の里踊りには「思案橋」「汐汲み」通称「傘踊り」「川舟」がございます。芦屋歌舞伎の流れを汲み、二百年以上の伝統がある優雅な踊りでございます。

◎**鐘崎の盆踊り**（福岡県無形民俗文化財）…古代より優れた漁労技術で全国津々浦々に其の名を馳せた宗像海人発祥の地鐘崎の盆踊りでございます。起源は鎌倉時代の念仏踊りですが、口説きは佐渡方面、太鼓は能登の輪島、踊りは南方から伝わったと云われます。如何にも宗像海人の故郷に相応しい由来を持つ、素朴で躍動感に溢れる盆踊りでございます。

◎**神湊の盆踊り**（宗像市無形民俗文化財）…神湊は古来、海上交通の要衝で、江戸時代には上方商人の廻船が出入りし、大層にぎわっていたそうでございます。其の上方は江州の商人が正徳五年頃、旅の無聊を癒す為土地の若者に雅やかな京風の手踊りを教えたと云うのが、この盆踊りの起源と伝えられて居ります。

つづく（記念館）

いろはかるたのご紹介　そ　宗祇（そうぎ）　ケムペル　シーボルト

エンゲルベルト・ケンペル（1651～1716）はオランダの博物学者で医師。元禄年間（1688～1703）五代将軍綱吉に謁見のため江戸参府の途中、木屋瀬宿に立ち寄る。フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（1796～1866）はドイツの博物学者で医師だが、オランダの医官や商事会社顧問として二度来日。文政九（1826）年の江戸参府の途上、脇本陣（町茶屋）の薩摩屋に宿泊。シーボルトの鳴滝塾に入門を願う高野村（現・宮若市）の医師・武谷元立らと面会した。

シリーズ 文化の薫る町 木屋瀬

第六回 筑前木屋瀬宿 問屋（といや）

江戸時代筑前六宿のひとつとして繁栄した木屋瀬宿は、古来より、遠賀川水運の物流基地として町が成立しました。今からは考えられないことですが、当時は川船による物流が主力で、木屋瀬は大型船の限界地で多くの保管庫が河川敷に立ち並び小屋の有る瀬戸が木屋瀬の地名の由来とも言われています。

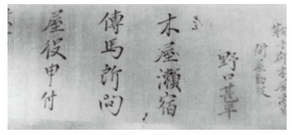
川船時代の遺構と言われるのが土手に聳え立つ銀杏の巨木です。大銀杏は川船の船着き場の目印でした。又、産土神社の境内に建つ参籠殿は木屋瀬の船頭百名で奉納したものです。川船が衰退し始めた明治三十二年に扇天満宮の境内に建立された金刀比羅宮は、木屋瀬の船頭が川船の衰退を見越し船頭の生きた証として残したものでしょう。

さて、木屋瀬は宿場町と呼ばれますが旅籠がある町の意味でしょうか、宿場は宿駅ともよばれ幕府の重要な行政機関の一端を担っていました。長崎街道沿いの直方、小竹、植木は宿場とは呼びません。それは、問屋がないからです。問屋（人馬取り継所）が有り宿が有るところが宿場町と呼ばれます。問屋とは、国を統治するに無くてはならない制度で、律令国家が成立した大化の改新時に作られた制度で徳川家康が完成させた情報伝達と物流の全国的システムです。問屋は常時、馬や飛脚、人手を二十四時間体制で待機して問屋から問屋へ受け渡し情報伝達、物流の任務を果たしています。小倉から長崎までは二十五の宿場（問屋）がありました。特に長崎街道は外国との交渉もあり、重要な役割を持っていました。幕末の木屋瀬の問屋の責任者は野口甚平です。問屋の場所は現在のみちの郷土史料館の前の野口家です。明治に入り問屋制度が無くなりましたが、明治政府は郵便制度をつくり幕末の問屋制度を活用して運用しました。明治四年十二月五日に江戸時代の問屋役の野口甚平を木屋瀬郵便局長として開局しています。当時の木屋瀬は博多、小倉、久留米と同等の郵便の取り扱い量でした。その後、息子の野口甚米が明治十四年に二代目局長として十九歳で就任しています。甚米は明治三十年に初代の木屋瀬商工連盟会長に

野口甚米

も就任しています。ちなみに、商工会の結成は、当時石炭の取り扱いで日本一と称せられた若松と並んで早くその繁栄振りが想像されます。問屋のあった場所は明治四十年に火災に遭い消失しましたが焼失後すぐに同じ場所に前と同じような造りで再建しています。

野口家は、間口六間半、平入二階建て角地は入母屋作りで北側は切り妻作りとして隣家と接しています。母屋の南側に土間を設けその土間にそって、店、帳場、座敷、中庭、蔵、裏庭（畑）、室見川に続く典型的な町屋住宅です。いまだに、屋根に泥を置く数少ない瓦屋根で鬼瓦が見事です。木屋瀬宿の中央に位置する築百年を超す宿場の遺構を代表する古民家です。



写真上：問屋役申付書
写真下：問屋跡（現野口家）

流れ星長崎街道夢の跡
雪もよう声も走るや継飛脚

本町　野口靖彦

こやのせ座のイベント

新春イベント 木屋瀬いろは歌留多大会

木屋瀬の文化と伝統が織り込まれた、木屋瀬ならではの歌留多大会です。新年恒例の行事ですので、子どもも大人も奮ってご参加ください。

▼日時…1月9日（月・祝）10時から
▼会場…長崎街道木屋瀬宿記念館
こやのせ座

新春イベント こやのせ座 New Year コンサート2023

響ホール室内合奏団の団員数名に出演していただく恒例のコンサートです。毎回楽しみにしておられる方が多く、今回はどのような楽曲が披露されるかご期待ください。

▼日時…1月22日（土）14時から
▼会場…長崎街道木屋瀬宿記念館
こやのせ座

木屋瀬いろはかるた大会

こやのせ座NewYearコンサート

※イベントの詳細は木屋瀬宿記念館までお問い合わせ下さい。

わたしの昔話

宿場踊りとともに

木屋瀬は文明以前から開けた宿駅であって、筑前の六宿（黒崎、木屋瀬、飯塚、内野、山家、原田）の一つに数えられ、豊前大里から長崎、薩摩に通ずる街道筋にあった。また福岡、唐津、平戸に行くには駅の西から遠賀川を渡り、植木を経て赤間に出ていた。これは、慶長以後、始めて開けたのであって、いわゆる内宿通り（木屋瀬、赤間、畦町、青柳、箱崎）追分でもあった。こうして、往時は日夜殷賑を極めたこの宿場も、時代の流れと共に昭和の今日では、もはや昔日の面影を偲ぶよしもないが、崩れかけた南の構口とか、飯塚、赤間道の追分の道標に、わずかにその名残りをとどめている。追分というのは、道端に「従是右赤間道」と刻まれた石の道標でもわかるように道の分かれをいう。木屋瀬の町に入ると、町は復路町ではなくて一筋町となっている。忍びの者や狙撃者に備えたものだという。

飯塚木屋瀬碁盤のおもて
駒をはやめて黒崎に

これは昔、雲助がうたった長持唄というが、冷水峠の険にくたびれた雲助達にとって、木屋瀬街道はたんたんとして碁盤のようだ、という実感のこもった唄だ。この道は鉱害で、でこぼこになっている。

木屋瀬は、大名行列が一泊できる本陣をそなえた宿駅なのだ。

木屋瀬のことは古い書物にいろいろ出ている。有名なのは宗祇法師の「筑紫道記」（文明十二年、一四八一年）で「こやの関という所にて草の枕を結ぶ、暁ちかき夢に誰となき男、天神と名のりて扇をわれに賜ると見はべりて夢さめぬ」というのがある。

いま、この町にある扇天満宮というのは、この縁起によるのである。

鎖国時代には、海に開いた、ただ一つの窓である長崎と江戸を直結する文明街道であった。この道を通った、きらびやかな大名行列や、オランダから将軍に献上する象や虎、孔雀が通っているのを村人がびっくりして眺めている姿を想像すると心楽しくなってくる。

徳川八代将軍吉宗の享保年間（一七一六～一七三五）木屋瀬の数奇者がお伊勢詣りの土産にと習って帰った伊勢音頭に大名行列供奴の仕草や「イザ・アトセイ・ソッ」の掛け声も、とり入れられて宿場踊りとなり、今に伝わっている。

手甲、脚絆に三度笠も、お伊勢詣りの道中姿そのままだ。月に踊り、雪の宴にも踊って、こ三百年になる。哀婉なリズムの素朴な踊りである。

宿場踊りに三種ある。

・並手（思案橋とも呼ばれる）
・次郎左（みやこ）
・本手

並手の中の男の踊りに「七手」がある。「鼻取」が音頭で、おてんき（お天気）ひめじょ（姫女）さんばそう（三番叟）うしろ（後ろ）みざを（水棹）とあみ（投網）やじろべ（弥次郎兵衛）と踊りに七ツの変手がある。テンポは早い。次郎左は単調な振りを繰り返す。音律が優しい。本手は変化に富んだ悠長な舞である。

囃は太鼓（尺五寸以上）三味線。三味線の調子は並手、次郎左、本手共々「二上り」である。

踊子の服装は男女共手甲、脚絆、男は三度笠を腰にブラリ提灯を差して踊る。女の笠は妻折れ。唄い方、囃し方の服装は踊子と同柄の着物であるが、男は笠、手甲、脚絆を着けないで手拭を頭にかぶる。女の三味線方は、手甲、脚絆はつけるが、頭は妻折れを着けないで「鳥追い笠」を着ける。《現在は男と同じ》

氏神様の祭りに奉納したり、盆の新仏の門で踊る。正式の服装をつけないで浴衣がけのまま踊るし、ここ四十年来、毎年盆の十六日（八月十六日）には仮装して踊っている。《現在はなし》。

木屋瀬の各家々、町内寄りなどの宴会には、必ずこの踊りが口三味線などでも踊られる。この踊りが出ないと宴がお開きにならないといってもよい位である。

本町　柴田由美子

「柴田豊廣遺稿集」より

木屋瀬宿記念館 収蔵品紹介

「ヤマの災害防止」（山本作兵衛　作）

今回紹介するのは山本作兵衛の作品である「ヤマの災害防止」です。これまで裸で坑内作業を行ってきた労働者たちに“裸作業の廃止”の鉱則が発表された際の記録画となっており、その内容は、簡単な衣服・地下足袋かゴム靴・軍手を着用しなければ、「作業中の負傷を公傷に認めず」という厳しいものでした。最初は反発があったものの、この鉱則が実施されて以降、小さな怪我を負う炭鉱夫が減ったことが記録されています。

（長崎街道木屋瀬宿記念館　学芸員　加藤　悠）